

特集

地域の風土や文化を核にしたまちづくり

古き時代の城郭・城下町、門前町などの歴史文化遺産や伝統に培われた生活。あるいは恵まれた自然環境に裏打ちされた風景。このようなまちの遺産を、地域の宝とらえて観光や文化政策、コミュニティの再構築など、新たにまちづくりに生かす自治体が増えています。

国も、平成20年に「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（歴史まちづくり法）を制定し、郷土の遺産をまちづくりに生かす取り組みを後押ししています。

今回の特集では、地域に残る文化・自然遺産の価値をさらに向上させるために重要となる地域の構想力について考察するとともに、地域資源をまちづくり・まちおこしに生かしている都市自治体の事例を紹介します。

寄稿 1

地域資源をどのように見いだすか
それをどう生かすか

東京大学先端科学技術研究センター教授 西村幸夫

寄稿 2

富岡製糸場の世界遺産登録を
見据えたまちづくり

富岡市長 岡野光利

寄稿 3

「平家落人伝説」と「うだつの町並み」と

三好市長 俵 徹太郎

寄稿 4

祈りの島の歴史と豊かな自然を
景観まちづくり計画で再生

五島市長 中尾郁子



地域資源をどのように見いだすか それをどう生かすか

東京大学先端科学技術研究センター教授

西村幸夫 にしむらゆきお



大災害後のまちづくり

これまでもまちづくりには地域の個性やアイデンティティが重要であることは誰も耳にたがえるほど聞かされてきた。地域の魅力づくりのために風景や伝統行事、食や食材など、さまざまに地域をプロモートする試みが各地でなされていることも各所で紹介されてきている。

ただ、東日本大震災後や9月に紀伊半島を襲った台風12号の豪雨による土砂災害など相次ぐ大災害を経て、今後のまちづくりを考えることは、被災地ではなくても、これまでとは異なった視点が必要であるように思える。そうでなければ、災害復旧や震災復興などの大規模プロジェクトの陰に隠れて、地域資源を生かしたまちづくりには光が当たらないといった偏狭な視点からではなく、地域の将来

を考えると、地域資源とは一体何であるのか、といったより本質的な視点が求められると考えるからである。

では、異なった視点とは一体どのような視点なのか。

恐らくこれまで得てすると表層的にとらえられがちだった地域の個性や魅力といった見方を、より突き詰めて考える必要が出てきたということだろう。美観形成や「景観形成」ということだろう。美観形成や話題提供のための「イベント」ではなく、より根源的に必然性を感じられるまちづくりの掛かりとは何かを考えなければならぬのである。地域に対する一層深い構想力が試されているのである。

この問いに現時点で確たる回答があるわけではないが、少なくとも次の一見当然と思えることを共通して確認することから始める必要があるように思う。

の主要幹線もめったなことでは変わらない。さらに学校、駅、役場といった誰でも共通して利用できる大規模施設も、たとえ被害があったとしても再建がもちろん最優先の課題となることは疑いない。都市の骨格を決めるようなこうしたインフラとその構成も都市の個性であるといえらるだろう。

こうした都市施設のほとんどは近代の産物であるので、これらはある意味、都市の近代化の生き証人であるということもできる。

文化的景観や信仰など

第三に、地域の風土に根ざしたものであること。雪の季節や梅雨の時期、盛夏の情景、紅葉の色彩など、季節ごとの特色はまさしく地域独特のものである。これに田植えされたばかりの水田や稲穂の色付き、棚田の風景、いさり火や海苔ひび、植林された林など、生業が生み出した風景を加えると、地域の個性は一層彩りを増す。

山の雪解けの形が生業の準備と密接に関連した習俗を生み出した雪形や防風林の風景などを加えると、近年盛んに注目されるようになってきた文化的景観というものの見方とびつたりと一致することになる。

第四に、長年培われてきた地域の習俗や信仰に根ざしたものであること。祭りや芸能に

は物理的な災害を乗り越えるだけの力が備わっている。小正月の行事や地藏盆など、それぞれの地域には似ていながら少しずつ異なるさまざまな儀礼や風習が残されている。

これに宗教行事や祭礼の神事を加えると、日本はさながら無数の無形文化遺産があふれかえる近代国家であるということができ。これも大災害を越えて慣性を継続させることができるインフラであるといえる。そしてそれらを支える場としての神社や祠があるとするならば、それらの立地も不易のものであろう。

第五に、さらに根源的には、城下町や宿場町、在郷町といった都市の由来そのものも、変わりようのない都市の個性である。ただし、都市の由来という現在の都市の課題とはかけ離れた話題としてとらえられ、都市紹介の単なる枕ことばのようなものとして、あまり意識されずに取り扱われてしまっていることが少なくない。

都市のこうした固有性をどう評価するか

大災害にあっても変わらないものをその都市の最も根源的な固有性、個性のようなものだとすると、それは短時日のうちに創造したり、意識して発掘したりすることによって初

大枠としての大地形やインフラ

第一に、地域の本質的な資源とは、大災害によっても変わらない地域の個性に根ざしたものであることである。その典型例は、大規模な地形的特色であろう。山や海、丘や坂、川や入り江などが織り成す地域の風景は、よほどの大災害でも変わらない。

つまり、このような地域の大地形によって立つような地域の個性を発掘することで。例えば、里山や里海、そこでの山の幸や海の幸、さらにはそうした地形がもたらす産業が生み出した光景はどのような災害があっても普遍的な地域の価値であろう。重要な地形的な特色やその風景、そこから眺望なども結果的に地形が生み出した特徴であるといえる。

第二に、都市の目抜き通りや駅前通りなど

めて明らかになるような性格の表層的な都市の資質とはまったく異なっているということがいえる。

さらに言うと、いちずに空間の画一化・効率化を進めてきた日本の都市の近代化によって、このような固有性とは、都市の制約条件そのものであり、ある場合には障壁そのものでもあったともいえる。都市空間の画一化・効率化とは対極にあるからである。近代化にまい進する当時の人々にとってはそれは必ずしも尊重されるべきものとは映らなかったに違いない。

一方で、これらの「変わらないもの」を列挙してみると、それら自体は所与のものとして都市が置かれている前提のような条件に過ぎず、努力して生み出した地域資源とは異なるように見える。五点挙げた「変わらないもの」相互の関係も見いだしがたく、今後のまちづくりにはどのような手掛かりとなり得るのか、はなはだ心許ない。つまり、「変わらないもの」として挙げたものは都市の前提条件としての要素に過ぎず、ここにいかに都市の個性を色付けしていくかは、その後の努力にかかっているように見えるのである。

しかし、もう一度、都市にとって「変わらないもの」を見つめ直してみよう。ここに、うわべだけの美観術ではない、都市にとって

富岡製糸場の世界遺産登録を 見据えたまちづくり

まちの概要

富岡市は、群馬県の南西部に位置し、東京から約100kmの距離にある。東は関東平野に続く平坦地で、西に日本三大奇勝の一つ妙義山、南北は丘陵地帯であり、中央部を鐮川とその支流である高田川が流れ、その流域に平地が開け、市街地・集落地を形成し、四季の変化に富んだ自然が豊かで、風光明媚な地域である。

江戸初期には、加賀前田藩の五男利孝が一万余石をもって封ぜられ、七日市藩が置かれるとともに、砥沢村(現在の南牧村)の砥石輸送の中継点として約400年前に新田開発が行われ、住民の移住とともに、現在のまちの原型が形作られた。

明治5年、政府の殖産興業政策の一環として、わが国の近代産業の先駆的役割を果たした官営富岡製糸場が設立されたことにより、富岡の名は一躍全国的に知られるようになった。

つまり、大災害の前後においても一貫した都市の要素というものは、ある一定の構成原理の中で統一的に理解できるものなのである。その構成原理とは、まさしくそれぞれの都市がよって立つまちとしての構想そのものであるということが出来る。

地域資源とは、究極のところ、都市の構想をいかに受け継ぐかを考えていく際に、ようやく見えてくる手掛かりとしてあるのではないだろうか。

もちろん、もっと分かりやすい地域資源と一般にいわれているものはある。文化財建造物や巨木、名所の風景、古来伝承の由緒地など、これまでも一般に地域の個性をつくり出すものと考えられてきたような資源である。

当然、これらの点的な資源は、都市にとって重要な宝なのであるが、それを単に表層的に磨き上げたり、つなげたりするだけでなく、それがなぜそこに存在しているのかという理由を掘り下げることによって、より根源的な都市の構想力といったものの自体に迫れるのではないかと考える。そうした作業を経ることによって、従来、パーツとして扱われてきた点的な資源の持つ意味が深まっていくことになる。たとえ大災害で壊滅的な被害を受けたとしても、復興の手掛かりが一つの地域資源として再生するという道筋も見えてくるのである。

つまり、地域の構想を継承するといった視点で自らが見据えたいまちを見直すと、地域資源もおのずと見いだされるといえる。これまで知られていた地域資源も別の光が当たることになるだろう。

都市の個性・固有性を論じるということは、このような作業を繰り返すということにほかならない。単純にオンラインワンを発見したり、創造したりすることではない。オンラインワンは、地形を見て、都市の由来を考え、都市施設の配置を確かめ、気候風土を感じ、生業や信仰の姿を体感することによって、おのずと見いだされていく都市の個性なのである。それは都市をどのように構想したかといった過去の努力の蓄積のたまものでもある。

近年、景観法や歴史まちづくり法が制定され、各地で地域の風土や文化を核にまちづくりをしようという動きがこれまでも増して広まってきている。これは表層的な歴史文化版美顔術ではない。作業の本質は、都市の個性・固有性を再発見する努力を今日も続けることによって、現代版の都市構想力を実体化することである。その努力はおのずと歴史や文化の森に分け入っていくことを要請することになるから、私たちはこの道をたどる必要がある。

富岡市長

岡野光利



た。現在、富岡市では、群馬県と連携し、富岡製糸場の世界遺産登録という大きな目標に向けてまちづくりを進めている。

富岡製糸場の価値

富岡製糸場は、明治5年、政府が殖産興業の一環として、広大な敷地にフランスの技術の力を得て建設した器械製糸工場である。養蚕が盛んな地域で優良な原料繭が確保できることや製糸に必要な水の確保が容易かつ豊富なことなどが、この地に建設されたゆえにある。

建設に当たっては、明治政府が雇ったフランス人が技術指導したが、施工は日本人で、西欧の技術と日本の在来技術が混合された、木骨煉瓦造の建造物群である。約20年間の政府経営の後に民間に譲渡されたが、昭和62年に操業を停止するまでの115年間、一貫して製糸工場として利用された。

富岡製糸場には、明治4年から8年にかけて

て建設された延長140mの木骨煉瓦造の練糸所をはじめ、東置繭所、西置繭所、蒸気釜所、首長館、検査人館、女工館、鉄水槽が創建当時のまま現在も保存されている。

この富岡製糸場を核とした「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、高品質生糸の大量生産の実現に貢献するとともに、養蚕と製糸の技術交流、技術革新の証拠となる遺産群であり、日本の近代化のみならず、アジア、そして世界の絹産業、絹の大衆化に大きな影響を与えていることが、世界遺産として求められる顕著で普遍的な価値となる。

地域資源を生かしたまちづくりへ

富岡市の中心市街地は、商業・業務の中心として繁栄し、社会経済の上で重要な役割を担ってきたが、モーターゼーションの進展や市街地の人口の減少などにより、その機能が著しく低下してしまっただけでなく、土地区画整理事業により、潤いと活気



本質的な地域資源が隠されているといえないだろうか。例えば、上記五つの要素は、それぞれ独立したものだろうか。都市の由来や立地は、大構造としての地形を抜きにして考えることはできない。主要都市施設の配置や骨格となる幹線道路のレイアウトは、当然ながら都市の機能に即して古来より計画されており、その都市の機能は都市の立地や地形という制約条件のうちにある。祈りや風俗の形の大枠はやはりその場所の大地形に規定されており、地域の気候風土にも依拠している。都市における人間活動も、大きく言えば、都市の物理的な環境に立脚しており、都市の物理的な環境は、以上のような連関の中にある。



座繰り体験で養蚕文化を継承

た。さらに、平成21年3月に富岡市景観条例を制定したことにより、緩衝地帯（バッファゾーン）として保護するための制度が整ったわけである。

現在は、景観形成ガイドラインの策定を推進するとともに、屋外広告物条例の制定に向けた準備を進めており、富岡製糸場や歴史的建造物に見られるデザインと調和した街並み景観形成に向けて、歩を進めているところである。併せて、街なかに点在する歴史的建造物の登録文化財制度を見据えながら、歴史的建造物を保全、活用した街並み景観を形成したいと考えている。



春の西繭倉庫

に満ちた中心都市機能を持つ拠点としての再編成を目指した。

このような中で、群馬県では、富岡製糸場の世界遺産登録に向けた取り組みを進めることとなり、平成17年7月に国史跡指定、平成18年7月には国重要文化財に指定され、平成19年1月には「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産暫定リストに登録された。

世界遺産登録には、富岡製糸場の周辺部が緩衝地帯（バッファゾーン）として適切に保全されていることが前提条件となる。保全する上では、富岡製糸場を背景とした歴史的な街並みや街道の形状などを保全することが大切

富岡製糸場には、世界遺産暫定リスト登録以降、年間20万人を超える方々が訪れるようになった。しかし、来場者がただけまことに経済的な波及効果を与えてくれているかという点、まだまだ物足りないという状況である。富岡製糸場の来場者に街なかを回遊してもらい、ものを買ってもらったり、食事をしたりしてもらい、さらに、滞留時間を長くする仕組みづくりが必要である。

そのためには、街なかの魅力に磨きをかけることはもちろん、古くから文人墨客が訪れ、妙義荒船佐久高原国定公園の中心となる妙義山と富岡製糸場との連携、富岡製糸場と周辺地域とのストーリー性を考慮した広域観光、富岡製糸場と連携した養蚕文化の継承・振興策としての養蚕体験、そして富岡シルクのブランド化などの取り組みが不可欠である

まちづくりの課題と展望

また、世界遺産登録を見据えたまちづくりを推進していく上では、市民・事業者・行政の協働による取り組みが重要である。富岡製糸場解説員の会や富岡製糸場世界遺産を目指す連絡協議会など、多くの団体が富岡製糸場の世界遺産に向けた活動を行っている。それぞれが自分たちの役割を認識しながら、世界遺産という大きな目標のために一体的に取り組んでいるところである。



富岡製糸場の価値を伝える解説事業

まちづくりを進める上では、「不易流行」が大切である。変えてはいけないことと、変化に対応しなければならぬことを、見極めながら進めることが重要であり、これを見誤ると、将来にわたって持続可能なまちにはならない。まちづくりを進める上での不易とは、富岡市の歴史的なもの、文化、自然など、地域固有の資源であり、流行とは、その時々々の市民の皆さんのニーズや行政の課題など、変化への対応である。

富岡製糸場の世界遺産登録を見据えたまちづくりを進めることは、地域文化の継承や新たな地域文化の創出、富岡らしい景観形成、愛着や誇りの持てる郷土づくりなど、さまざまな観点から見ても、よりクオリティの高い、将来にわたって持続可能なまちづくりになると考えている。

富岡製糸場は、中心市街地に位置しているが、今まで観光客が訪れる施設ではなかったため、駐車場や食事処など、まちとしての受け入れ態勢が整っていない状況であった。そこで、駐車場整備を喫緊の課題として取り組んできた。

富岡製糸場の周辺部には、明治期から大正期、昭和初期、それぞれの時代の歴史的建造物が点在するとともに、界隈性のある飲食店街がある。この界隈性のある飲食店街、趣のある路地は、日常の生活感やコミュニティが感じられるなど、訪れる人から魅

世界遺産登録を見据えて

富岡製糸場は、中心市街地に位置しているが、今まで観光客が訪れる施設ではなかったため、駐車場や食事処など、まちとしての受け入れ態勢が整っていない状況であった。そこで、駐車場整備を喫緊の課題として取り組んできた。

また、世界遺産登録という大きな目標をテーマにまちづくりを進めることは、住民の理解やコンセンサスが得られやすく、地域資源を生かすことにより、持続可能なまちづくりとなると考えている。

また、歴史を生かした街並み景観を形成するために、平成17年12月に景観行政団体となり、平成18年度から3カ年で景観法に基づく景観計画の策定に取り組み、平成20年12月に富岡市景観計画を策定した。この計画では、富岡製糸場の世界遺産登録に向けて、その文化的な価値を保全・管理するとともに、その魅力を一層高めようという観点を踏まえて、富岡製糸場周辺特定景観計画区域を定め



繰糸工場内部

「平家落人伝説」と「うだつの町並み」と

三好市長 俵 徹太郎



NHK大河ドラマ「平清盛」

平成24年NHK大河ドラマは、松山ケンイチさん主演の「平清盛」に決まった。平清盛の弟、平教盛の次男であった平国盛は、平教経の初名で、元暦2年(1185)屋島の戦いに敗れた平家一族は、安徳天皇を奉じ、讃岐山脈を経て、阿波へと入り、現在の三好市井川町井内にとどまったが追手に脅かされ、祖谷山阿佐(現三好市東祖谷)にたどり着き、阿佐家の祖となったとされている。阿佐集落には平家の末裔と言われる阿佐氏が居住し、平家屋敷や平家のもと伝えられる赤旗(軍旗)が数百年前から継承されている。

歴史と観光資源の宝庫

三好市は、「平成の大合併」により、平成18年3月1日、徳島県三好郡8町村のうち6町村(三野町、池田町、山城町、井川町、東祖谷山村、西祖谷山村)が合併して誕生した。

観光をリーディング産業として

昭和50年に文化財保護法の改正により「伝統的建造物群保存地区」制度が制定され、平成17年12月27日東祖谷落合地区が選定された。急峻な斜面に民家と畑地が並び、独特の景観を見せる落合集落。伝統的な家屋は、その多くが昭和初期以前に建てられ祖谷地方の民家の特徴を色濃く残し江戸中期にさかのぼるものも少なくない。また、急傾斜を切り盛りする石垣の数は350カ所にも上り、田畑、里道などと一体となって、失われつつある山村集落の様子を見事に表している。

また、平成20年7月23日に施行された観光圏整備法に基づき、「し阿波観光圏」が四国で初めて認定された。平家落人伝説や江戸・明治期の商家が残るうだつの町並みなどの歴史・文化は、「日本の原風景」として国内外から注目を浴びており、「落合集落」に代表される山肌



景観計画策定 シンポジウム

張り付くように形成される山村集落や棚田の景観は、今なお圏内の各地に残されており観光交流にとって極めて価値の高い地域資源である。近年、農山村の自然や暮ら

市の面積は721.48km²で四国一である。西日本第二の高峰剣山(1955m)や、祖谷溪や大歩危・小歩危などの景勝地、四国霊場第66番札所・雲迎寺、平家落人伝説が残る祖谷のかずら橋、さらに、阿波踊りや祖谷平家まつりなどのイベントがあり、国の伝統的建造物群保存地区選定「落合地区」のほか、井川スキー場腕山等の文化的遺産や観光交流資源など自然豊かな地域である。四国山地に位置し深い溪谷に囲まれた「祖谷地方」と古い街道沿いに形成された「吉野川流域」があり、祖谷地方は古くから独自の文化と固有の風土がはぐくまれ、かずら橋に象徴されるような平家落人にまつわる遺跡や伝説が数多く伝承されてきた。一方の吉野川流域は、伊予街道・撫養街道に沿って集落が形成され古来より交通の要衝として栄え、経済・文化の中心的役割を担ってきた。祖谷地方や吉野川流域には、それぞれ伝統産業や独自の文化によって形成された美しい山村集落や町並みがあり、そこ

しが体験できる体験型観光が注目されており、本市では、自然・伝統文化の体験メニューを用意し、都市住民との交流の取り組みを行っている。これらの体験メニューや田舎暮らし体験としての民泊などを提供する着地型旅行商品の販売を行うワンストップ窓口として観光地域づくりプラットフォームの中核法人である「そのら郷」を設立し、特に中学・高校の体験学習や修学旅行などの教育旅行誘致の取り組みを強化している。

平成20年3月に制定された「三好市総合計画」において、「まちの個性を生み出し、歴史文化の継承と創造」「豊富な資源および、優遇された地理的条件を最大限に活かした魅力ある煌めくまちづくりを進め、観光産業を将来の主産業に位置づけていくこと」を掲げ、三好市のリーディング産業である観光振興に積極的に取り組んできた。

そして、平成22年11月22日「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき三好市歴史的風致維持向上計画が認定された。計画の重点区域の一つは祖谷地方であり、「活彩祖谷村」による地域呼びかけ運動、耕作放棄地の解消、「コミュニティ祖谷」による植樹など景観保全活動や平家落人伝説の継承と観光案内、「天空の村かかしの郷」による地域おこし活動、さらに、NPO法人麓庵トラストによる歴史文化・景観保全と国際交流の振興などの活動が盛んに行われている。平家落人伝説の地において、阿佐家住宅(平家



東祖谷落合重要伝統的建造物群保存地区全景

で営まれる伝統産業と息づく伝統文化によって固有の歴史的風致が形成されている。三好市の歴史的風致は、平家落人伝説をはぐくんできた祖谷地方と伝統産業で栄えた吉野川流域に一体となって継承されている「伝統文化」そのものである。

もう一つは池田地区で、「大空云」による景観植樹や体験観光農園、地域の歴史に誇りを持つ方々で組織された「おいでなして池田」によるボランティア観光ガイドなど、多くの地域おこしグループによる歴史文化・景観保全活動が積極的に進められており、弘法大師が開創したと伝えられる「箸蔵寺(重要文化財)」とたばこ産業で栄えた「うだつの町並み」などに代表される歴史的建造物が多く存在する。その中心的な役割をなす川人家長屋門や旧真鍋家住宅の保存・修理事業などを行い、自然環境や市民活動が息づく歴史文化と歴史的建造物が一体となった魅力ある町並みの景観形成を促進し、地域独特の町並みや景観眺望の形成と歴史的風致の維持向上を図ることとしている。

景観計画の策定

平成18年1月20日旧西祖谷山村が景観行政団体となり合併で三好市が引き継いだ。平成21年7月から歴史的風致維持向上計画の策定とともに三好市景観計画の策定に取り組んだ。良好な景観の形成には、市民や事業者、団体などが一体となって景観に対する関心を高め、豊かな自然や歴史・文化と人々の暮ら

祈りの島の歴史と豊かな自然を 景観まちづくり計画で再生

五島市長

中尾郁子



はじめに

五島市は平成16年8月1日に1市5町(旧福江市、旧富江町、旧玉之浦町、旧三井楽町、旧岐宿町、旧奈留町)が合併して誕生しました。

長崎から100km西方、東シナ海に位置して、11の有人島と52の無人島から成っています。11の有人島にはそれぞれ歴史があり、島民性も特徴があり、合併後の町の個性となっています。



まちを指して「いけばよいか」などについて議論が行われた。今後本市では、平成23年6月議会において制定した三好市景観条例に基づき「三好市景観計画」を「三好市観光基本計画」「三好市歴史的風致維持向上計画」などの既存計画と連携させながら市全体で景観まちづくりに取り組む体制をつくり、関係者間での情報共有、市民や活動団体間の交流や協力体制を確立し、景観からの地域づくりを進める。

市民が主役のまちづくり

三好市では自治基本条例制定に向けて、公募市民などで構成する市民委員会が協議を重ねる取り組みを進めている。市民委員自らが地域でワークショップを運営し、市民手作りでまちづくりの方向性や将来像、市民の権利・責務、行政の責務など、自治体の基本ルールを定める。この間、市内6カ所でまちづくり条例の住民説明会を開催し多くの市民にご参加いただいた。説明会では、「条例の必要性は何か。条例が出来たら具体的にどう変わるのか、何が起きるのか聞きたい」といった積極的な意見が出された。

三好市発足6年目を迎え、市内の限界集落は156カ所、平成22年国勢調査人口は、5年前に比べると4140人減少し、三好市を取り巻く情勢は日増しに厳しさを増している。このような時こそピンチを逆手にとって英知を結集し、三好市の特色を生かしたまちづく

りを推し進めていかなければならないと考えている。

私は、2期目マニフェストの3本柱の一つに、「豊かな教育環境、文化の薫りあふれる三好市」を掲げ、

「活力にあふれ文化の薫り高い三好市」を目指すことを市民にお約束し、本年度の最重要課題として、文化振興と観光振興を含む交流の推進に取り組んでいる。文化振興は、個人の向上心・創造性・感性を個人が積極的に努力精進し共同して美や技術を高め三好市としての地域力を高めることで、本市におけるまちづくりに必要不可欠なものであり、交流拠点施設整備を核とした文化振興・交流推進を一層強力に進めていきたい。

織田信長以前に戦国の天下人と言われた三好長慶は、三好市三野町で誕生したと言われている。三好市の歴史・文化・社会などについて研究する「三好市学術・文化学会」が発足し、伝統のある「祖谷平家まつり」に加え本年からは、「三好長慶武者行列まつり」が始まるなどその息吹は着実に芽生えている。



景観計画策定 市民ワークショップ

ウムでは、東洋文化研究家アレックス・カー氏から「まちが観光業で生きていくために、景観が守られていることの大切さ」などをご指摘頂き、パネルディスカッションでは、「三好市がどうい



自治基本条例 市民説明会

古くは遣唐使船の風待ちの港として、唐へ旅立つ大使や特使や学僧や船子を接待し順風を得て無事に船出に導いたり、航海の安全を祈願したり、奈良時代の国策の支援をした歴史を持つ島があります。

第16次の遣唐使は第1船に空海が、第2船に最澄が乗船して、4艘の船団で出発しました。東シナ海を一路中国へ向けて船出しますが、途中暴風雨に遭い、航海は難渋し空海は34日目に福州へ漂着したと記録されています。

また、倭寇の活動の拠点となった入江を持つ島もあります。

11の有人島の1つ 久賀島の豊かな自然

その島の1つ久賀島は面積が37km²、山が深く、入江が多く変化に富んだ海岸線が特徴です。海は青く澄みきっていて、どんな雨風の日でも海底まで透明度は変わりません。

山は檜、樺、ヒノキ、杉、松が多く、薪や炭の出荷で生計を支えた時代もありました。

特に久賀薪として当時のブランド燃料だったと言え伝えています。入江では海藻、サザエ、アワビ、ウニ、マテ貝、キス、イサキ、水イカ、タイなど海の幸が豊富にとれます。

田の浦入江には、入江いっぱいには、キビナゴが集まり、集荷のために入江を閉め切り、数日かけて出荷した時代もありました。

山は四季折々に変化し「五島グリーン」と表現される緑色の濃淡のパノラマを見せてくれます。島内に自生する椿は、82万本を数えます。岩屋観音が祀ってありますが、この付近は全山が椿で覆われ花の開花時期には見渡す限り椿の花が山全体を赤く染めます。椿の実の収穫も多く、昭和9年の記録では2700石を出荷したと記されています。

山からは石清水が湧き、その湧水が川となり、稲作が盛んで、五島一美味しい米の生産地で、それは現在も継承されています。

久賀島のキリスト教信仰の歴史

永祿9(1566)年にルイス・デ・アルメ



浜脇教会

されにくい隠れた信仰の文化をどのように表現して、視覚に訴えることができるか？
西洋の教会の構造に比較すると非常に小さな、素朴な日本建築の中に教会のコウモリ天井を取り入れ、祭壇を構えて、必要最小限の祈りの場所を構築した日本のカトリックの草創期の建築物を関係者がいかにように判定するか？
島々の人知れぬ場所に小さな教会を自力で建設して、朝夕の祈りをしながらつましい日暮らしをしていた島の信徒の生活をしのび



久賀島の風景

イダ、修道士ロレンソの2人が五島各地へキリスト教の布教に訪れました。その折、この久賀島へも渡り、はじめて久賀島にカトリック信者が誕生しました。その後消滅しましたが、再び1797年に大村から五島へ信者の移住が始まり、約3000名の信者が五島各地の集落に散って居住しました。とくに山間部が多い久賀島は人里離れた交通不便な場所を適地として入江ごとに信者の集落ができました。禁教令が發布されて、信者は潜伏キリシタンとなり密かに信仰を守って暮らしてい

ながら、景観まちづくり計画を作る話し合いは続けられました。
昔、道路も整備されていなかった時代に、交通不便な山間部や海岸に教会の建築資材はどのような手段で搬入したのか？
先人の苦勞、辛抱を忍び、話し合いはしばしば情緒的になりました。便利さ、スピード、手軽さを追い求める今の時代に、条例を作ることで気が付いた島の良さは数々あります。
人が住む島の島には先人たちが汐風から作物を守る防風林として栽培し育てた椿と共存して、花を咲かせ実を拾い油を搾って生計を立ててきた暮らしの知恵の伝承があります。
今、五島市全体には椿が439万本あります。



五島のやぶ椿

ました。江戸幕府崩壊後、明治新政府は引き続きキリシタン禁制の政策をとり、明治元年9月に久賀島の信者の弾圧、迫害が始まりました。とらえられた信者200名は6坪の小さな小屋に8カ月間閉じ込められる拷問を受けました。牢屋の窄(せま)い(殉教記念教会)がその跡地です。
明治6年禁教令解除で260年もの長い間密かに信仰を守り続けた信徒たちは全世界に對し信仰の自由を高らかに宣言しました。その証が長崎県の教会群です。今、その歴史的に存在価値がある教会群を世界遺産に登録するために準備が進められています。

景観まちづくり計画策定で得たもの 島の宝を再発見

久賀島の自然と、信仰の歴史と、人々の営みを丸ごと文化として景観を保全し、原風景を守り持続するために、五島市景観まちづくり計画を策定しました。

策定に当たっては、久賀島まちづくり協議会を設置し、市民参加の会議を重ねて、風化が進んだ場所の確認や、島に調和しない色合いなど島の風景になじまないものを改善するといった思いを共有してきました。

その結果、国指定重要文化財の『旧五輪教会堂』、信徒が閉じ込められた『牢屋の窄』、船着き場、椿林、展望台、段々畑、棚田など島の自然と信仰と島人の暮らしにより創り出された島の風景を丸ごと大きく包み込んだ景



旧五輪教会堂

観まちづくり計画が完成したのです。そのような取り組みや、島の風景が学術的にも高い評価を受け、平成23年9月、久賀島全体が国の重要文化的景観に選定されました。
島は過疎化、高齢化が進んで将来を悲観する材料ばかりが意識されていましたが、計画を作る過程を島民が共有したことで昔の良さを再確認して、島の歴史に自信が持て、昔食べていた島の食材や調理方法の再現や、椿の活用が大きく動き出しました。
教会群の世界遺産登録に向けて、形に表現

今後の課題

1 資生堂の需要を完全にカバーできる生産

椿の実を搾ったオイルは資生堂の洗髪剤「TSUBAKI」の主原料として使われています。先人が密やかに守ってきた信仰と椿と自然、その昔の風情を今一度原点に戻すことで、五島の島の持つ力を再確認できました。そのことが、資生堂の目にとまり、主商品の原料として採用されたのです。
この時代、郷土が持っている地力を再認識して生かすことで、この生きにくい時代を生き抜く知恵が生まれることを知りました。
離島の又離島にも宝はありました。

体制の強化

2 更に椿の葉、花、木の活用、アイデア製品の研究

教会群の世界遺産登録へ向けての行動

1 苦難の信仰の歴史をストーリーとして表現する

2 島全体を原風景に戻す努力を継続する

日本の最西端の小さな島の集合体の自治体ですが、島の力を最大限生かして島なりの飛躍を成し遂げたいと思っています。

『ありがとうございました』